

# 古建築の美意識の研究

Nara Women's University

生活環境科学系・住環境学領域　**坂井　禎介**　専任講師　SAKAI Teisuke　博士(工学)(東京大学)

■研究キーワード　保存修復,意匠,民家,建築技術史

■主な所属学会　建築史学会,文化財建造物保存修理研究会,日本建築学会

■研究者総覧　https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.c8382fdf15771715520e17560c007669.html

研究者総覧

## 研究概要

日本には古代から類まれな技術をもち、美しい建築を作ってきました。世界最古の木造建築が中国でも韓国でもなく、日本にあるということがその技術力の高さを物語っています。

その美しい建築を建てるためには、どのような技術を使っているのか、どのようにして建てたのか、どのような思いを建築に込めたのか、に興味をもっています。

それを明らかにするため、現存する建築の見せかけの部材(後述の1)と文献資料(後述の2)の双方から研究を行っています。丹念に読み解くと、当時の人の美意識や思いが透けて見えてきます。

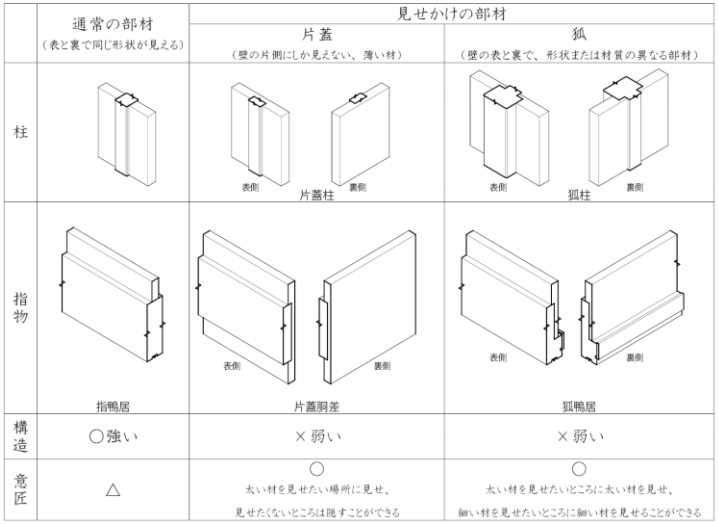



図　見せかけの部材の模式図

## アピールポイント

1　見せかけの部材から読み解く

建築の美意識を読み取ることは主観になりやすく、客観的に読み取ることは難しいです。客観的に読み取るための一つの手段として、見せかけの部材を研究しています。

例えば、柱は、建築の重みを支える構造材で、壁の表と裏に見えます。しかし、時々、通常の半分ほどの薄い断面で、壁の片側にしか柱が見えない、見せかけの柱(片蓋柱)が存在します(左図)。これは、その柱が見える側にのみ柱を見せたいという意図が読み取れ、その柱が配置されているところに柱をおきたい、という強いデザイン意図が読み取れるのです。このような見せかけの技法は柱以外にも様々存在します。そのような見せかけの技法から当時の人がどのような形態を美しいと考えたのかが間接的に読み取ることができるのです。

2　文献から美意識を読み解く

当時の人が建築に込めた思いを記すことが時々あります。方丈記を書いた鴨長明は鎌倉時代の方丈記で、自分の方丈の家のことを、「廣さはわづかに方丈(3m角)、高さは七尺(2.1m)が内なり。」と、小さいことを述べます。しかし、小さい理由は、「もし心にかなはぬことあらば、やすく外へうつさむがためなり。」と、気に入らなかったら別のところにすぐに引っ越しができるためだと述べます。その中からは、「春は藤なみ、夏はカッコウの声をきき、秋はヒグラシの声、冬は雪を楽しむと述べます。家が小さく簡素なことで周囲の美しい自然を音と目で楽しんでいたということであり、現代のミニマリストにも共通する、日本人が古来からもってきた重要な価値観です。

坂井の研究の詳細→https://researchmap.jp/sakaiteisuke
坂井研究室の詳細→https://www.sakai-lab.com/

お問い合わせ：奈良女子大学社会連携センター　Tel:0742-20-3734　Mail:liaison@cc.nara-wu.ac.jp

更新日：2025年1月1日